

## 蜂蜜の海を泳ぐ

尾崎日菜子

男は原付を法定速度無視で国道を走らせた。人魚姫のいる宮殿へむけて。男の心を支配していたのは、ほんのすこしだけ心配な気持ちと、他の多くは苛立ち。そして、隠せないくらい彼女のことが大好きって家父長たる気持ち。

なんせ、ここ1ヶ月全く音沙汰がなかったのだ。月末恒例行事として電話回線が料金滞納でとめられるとはいえ、あまりの音信不通で、最悪の場合人魚姫のミイラという希少なサンプルを拝謁することになるのではないかという、うすら怖い気持ちをなんともしきれず男は人魚姫邸を襲撃することを決心したのだった。

鍵の意味をなしているのかなしていかないのかさえよくわからないベニア板製の城門の前に、男は素早く原付を止めて、次の瞬間、深呼吸をした。万が一のミイラ発見時の心の準備と、その他一万分の9999の可能性である人魚姫の電波の強度に不用意に苛つかないためである。

「おい、俺やけど。入るぞ。死んでないよな？」

インターホンの壊れたベニア板の前で、男は叫んだが返事はなかった。どこまでも頭をもたげるミイラの第一発見者になるというげんなりする可能性を無理やりにも否定するために、男は扉を蹴破る勢いで中に入りたかったが、男の倫理というか怯えのような気持ち男を慎重にさせていた。いわゆる「バラック小屋」と呼ばれるような作りの人魚姫のお城は、洗濯物やらポストに溜まった郵便物やら、挙げ句の果てにはヒビのはいったガラス戸から中の様子が丸見えで、お姫様のお城の開放感は、男に裏の物干しで一呼吸置く余地を与えた。

ぐいーーーーーん

突然おかしな音が人魚姫のお城の中から聞こえてきた。とりあえず、ミイラの第一発見者にならずに済んだ男はホッとしたが、そのかわりに殴ってやりたいほどの怒りが男に唐突に取り憑いた。怒りに任せてダッシュで扉へ向かい、ベニア板の引き戸を荒っぽくガシヤンと開けて男は人魚姫に謁見した。

ぐいーーーーーん

入るなり、男は人魚姫と目があった。というよりも、人魚姫の女性器と男の視線が重な

った。人魚姫は左手で紙を見ながら、右手で「電マ」を自分のクリトリスに当てながら「お取込み中」だった。特に「お取込み」の姿を見られて恥ずかしがる訳でもなく、男の顔をちらりと人魚姫は少しでだけ微笑みながら、小さな声で男に言った。

「ちよつと待っててね。ショーケースにお人形さんを並べてるの。自分もショーケースに並ぶの。細かいことは後でね。」

毒電波や！

一ヶ月ぶりの電波だった。この毒電波は何回体験しても慣れない。言い訳か？ オナニーを見られて言い訳するならもつとまともな言い訳があるだろうに。だいたいこっちの心配のお礼もなく、オナニーを見られてやめるどころか待たされるといふ屈辱にたいして、と同時に、なぜか人魚姫の女性器を注視してしまう自分にたいして、男は人魚姫に聞こえないように小さなため息をついた。

「この甲冑に貰えるとしたら素敵じゃない？ でも、『下さい』ってあたしが言うんじゃない、『もう一つあるからこれ着なよ』って言われるのがいい。」

引きこもりのニート女でこんなことしかやることがないほど暇なのか、パリっとした紙を買う金もないのか、左手に藁半紙のようなペラペラの紙をもって、その紙に語りかけていた。

「あなたが英雄ということではなくて、その甲冑を着ればあなたに愛されるんですよ？ あなたは100年戦争の英雄なんかじゃなくてセクシーなボルノスターなんだから。そのあなたに愛されることがもしてきたなら、あたしもその中に入っている？」

自分を海底から来たお姫様だと主張する電波女のわりには、というよりも、暇しか資源がないような貴族だから当然と言うべきか、無意味な教養が男よりも人魚姫は豊富だった。そのことと、人魚姫の全く何事にも微動だにしない視線に取り憑かれて、人魚姫を浜通りの国道で保護して以来世話をやき続けてきた男にとって、人魚姫の「ずりネタ」が歴史的な何かである事くらいは容易に察しがついた。

「おい。集中してるみたいやけど。俺のこと忘れてないか？」

「悲しい顔するなら、無理には言えないよ。あなたには。そっちの君にもね。」

多くの場合、人魚姫とは会話にならないが、人魚姫の電波は男のフラストレーションと支配欲と性欲を刺戟する。人魚姫の耳によりダイレクトに届くように、男は距離をドタドタと縮めながら、男は声を荒げた。

「こっちは心配できてるんや。はよパンツをはいて『来てくれたのねありがとう』くらい、俺の顔見て言えや。」

「『来る』っていうか、海底では『行く』っていうの。英米式じゃなくて日本式の表現ね。だから『行ってくれたのねありがとう。あたしも行けたよ』ってもうすぐあたし言いそうだから、もう少し待てない？」

左手の糞半紙をブルブルと震わせながら、小さな声で人魚姫はこたえた。あまりに薄くて質の悪い紙のせいで、紙の半分が折れかかっていた。そこには明らかにやつつけ作業で描かれた中世の女兵士らしき肖像があった。100年戦争？ 英雄？ 甲冑？ ジャンヌダルクか何かか？ そういえば、ネットの違法ダウンロードサイトでミラジョボビッチの映画をこいつ観てたよな。で、何でこれが「ずりネタ」で、なんで俺はこの光景が「ずりネタ」になっとるんや…！ 電波のペースになっとる。

男は冷静になる為と、もっと主要な目的はこんな非正規ルートで本懐を遂げるのではなく、こんなボロ屋でも風呂に入ったたり歯を磨いたりして本懐を遂げる正規ルートの為に、人魚姫の手の内に入るふりをして言った。

「ところで、その絵、誰や？」

「ジャンヌダルク以外に見える？ ちゃんとショーケースに入れてあげたの。自分が入っても痛くないように慎重につくったから。君も安心して。」

「後の方はどうでもいいとして、ジャンヌダルクな。で、その紙もってなに喋ってるの？」

「だから、ショーケースのお人形さんって綺麗でしょ？ あたしもそうなりたくなって。」

「で、その電マでお仕事の真っ最中と？ まったくさ、お前の発想の意味がわからんねんけど、凡庸な地上人の俺には。それって海底人ではよくあることなんか？」

男は顔を引きつらせながら言った。

「考えてもみて。ジャンヌダルクは地上人に祭り上げられてショーケースの中で精液を下

ロドロにかけられたでしょ？ 今も昔も。その人と同じシューケースに入って、その上彼女の甲冑を彼女からプレゼントしてもらえたら、彼女に愛されると思わない？」

「愛される？」

「正確にいうところかも」

無職の分際で「お仕事」に訳のわからん禅問答をペラペラとよう喋りおるわ。普段誰とも話してないから、俺の戦術が裏目にでたか？ 男には持久戦に耐えられるだけの余裕も自信もなかったが、和平のカードも待たない男にとつての唯一の手段は傾聴だった。

人魚姫は確信をもった素振りで続けた。

「スク水を着たアイドルのグラビアがあるでしょ？ それをみて素敵だなんて思うことは、アイドルの着てるスク水を自分が着て、アイドルに素敵だねって射精してもらえたらいいなって願うこと。シューケースの中の誰も邪魔されない場所で、地上人の立ち入らないところで、そうやって話せたらいいなって願うこと。それが愛するってことですよ。地上人は違うの？」

男はなにか、自分が酷く馬鹿にされた気がした。そして、自分の何かが蹂躪された気分になった。ミイラの第一発見者になる覚悟も、スピード違反で検挙されるリスクも、すべてこの電波女に搾取された気分になった。お前の理屈より遙か以前にお前を愛してるはずなのに、この無神経な海底人にはまったく伝わらないのが、悔しいというより、腹立たしかった。絶対に口に出したくないことが男の口から、男の意図とは別のところでこぼれた。

「愛するってこと？ お前を拾ってから俺はずっとそうしてきてるわ。お前が鈍感で恩知らずなせいで伝わってないみたいやけどな。そうやってお前が『お仕事』してる時に、俺はリアルで仕事してる訳。それで、お前に現ナマをやるってお前が嫌がりそうやから、お前の家に来た時だけ俺がお使いでお前の好きなプッチンプリンを買ってくるようにしてるんや。俺の気持ちも考えろや。」

「うん。プッチンプリンを君が持ってきてくれる時、いつも君は君のプリンをつけて食べてっていいものね。甘くておいしいよ。君のは。それなら知ってる。」

人魚姫は脚をガクガクさせながらも、今までより悲しそうなトーンで、男の怒りに応えた。

「いや。だからさ。それはお前も望んでるやろ。俺がお前を買ってるみたいな言い方やめろや」

「あたしは望んでもいないし、拒んでもいないよ。今、望んでるのは、コンセントが抜けそうだから、コンセント押さえてもらうことかな、もうすぐなの。だから待ってて。」

人魚姫との会話に巻き込まれた男は靴を履いたままだった。靴を脱ぎ捨てて、カピだらけの畳の上のコンセントを仏頂面で男は押さえながら言った。

「なあ。そしたらさ。お前はなんで、お前の愛しのジャンヌダルク様がお前を望んでるって言えるんや？ ジャンヌダルクはお前みたいな奴に『ずりネタ』にされること嫌がってるって可能性は考えへんのか？」

「嫌がってるかもしれないね。『あなたも地上人みたいにあたしを扱うの』って彼女に言われるのかもしれないね。特別な女の子ってすぐに精液をかけられるターゲットになるでしょう？ 例えば、女の子がリーダーだったり、司令官だったり、珍しい国の楽器吹いたり、海底人だったり。ショーケースに女の子が並んでいるの。実際にこの世界では。でも、だからこそ、その時に誰かを愛することってショーケースの中でしか伝えられないでしょ。『凄く悲しいけど、あなたは美しくて、あなたになりたいけど、あなたにはなれないけど、その全部がウキウキするね』ってケースの中でささやきあうの。ねえ、ショーケースの外から拡声器で叫んだとしても、いったい何になるの？」

数分の沈黙の後に、人魚姫の瞳から一粒の涙が落ちた。電マのコンセントを押さえた不自然で滑稽な姿勢の男ですらも、その液体は男のシリアスな強迫観念と緊急の用事を召喚するには十分な物質だった。

「俺さ、もう少ししたらデモいかなあかんねん。その帰り道でプッチンプリン買ってまたこっちよつてもいいか？お前も今仕事中美たいやし、後でお互い落ち着いてプッチンプリンでも食おうや。」

そそくさと靴を履いて、ポケットの原付の鍵を確認した後、素早く男は玄関の引き戸に手をかけた。

「ねえ。君はいつも倫理とか正義の話をするけれど、なんでその話をしながら射精をするの？ 君はいつも正しいとか間違ってるって言いなから射精してもいい人を品定めするの？」

「デモの後、話そうや」

怒りと絶望と、そして人魚姫を愛しいと思う気持ちに、男の心は分裂しそうになりながら、人魚姫のほうを振り返らずに男はボソボソと独り言を言っただけで外にでた。

男は人魚姫のお城のすぐ近くのコンビニまで原付を飛ばした。店員に一言言ってトイレに駆け込むと、男は自分の性器を懲らしめるようにしごいた。男がトイレットペーパーに射精したちょうどその時、携帯のメールが届いた。人魚姫からだった。

「あたしたちは甘くてドロドロした蜂蜜の海を泳いでるみたいね。もがいてももがいてもネタネタしていて前にもいけない。透明度も低くてどこが前かもわからない。そうやっているうちに、窒息して蜂蜜漬けになってしまうくらいなら、肺呼吸なんて望まなければよかったと思うの。」

相変わらずの電波メールにたいして、男が精液もろくにふかないベトベトの手で携帯をフリックしながら返信を打った。

「お前と俺の平和の為にがんばってくるから。お前が蜂蜜の海を泳いで、俺とプッチンプリンを食べる日常が俺にとっての平和やから。愛してる。」

液晶の汚れた携帯とともに、いつものよりもテンションを上げながら、デモの集合場所へ原付を走らせた。原付のメット入れにコンビニで買ったプッチンプリン二つをいれて。

〈選評〉 言葉では説明できない批評性を言葉で表そうとする、文学の力が発揮された作品だと思えます。字数に合わせてだいぶ削ったとのこと、そのためか理解を助ける要素がやや不足している感がありますが、それでも主体であるということさえ奪われている「人魚姫」の絶望と、それでも生き続けるための形を探そうとする意思是強く伝わってきました。絶望を、「人魚姫」のほうからではなく「男」のほうから書いたことが、よかったと思います。(星野)